

近世庚申塔にみる流行型式の普及

— 江戸周辺における物質文化交流の復原への試み —

石 神 裕 之

- I. 問題の所在
- II. 分析方法の検討及び資料の集成
 - (1) 近世庚申塔の定義と研究の概略
 - (2) 型式学的分析の意義と問題点
 - (3) 対象地域の選定と庚申塔の類型設定
- III. 近世庚申塔に対する型式学的分析
- IV. 近世庚申塔による地域交流史の復原
 - (1) 庚申塔の流行型式にみる地域差
 - (2) 流行型式の普及と運輸機構の整備
- V. おわりに

I. 問題の所在

東京23区をはじめとして関東地方各地には、膨大な資料数を有する石造遺物が現存している。その全容については、近年の調査報告書の刊行により次第に資料的蓄積が進みつつあり、例えば東京23区に残存する庚申塔は、近世の紀年銘を有する資料だけでも1,500基を超える数量を呈する。従来、特に「石仏」と称されてきた石造墓標以外の石造遺物は、歴史資料としての活用がなされてはきたものの、考古学的な立場から十分な資料的位置づけがなされているとは必ずしもいえない。

石造遺物の種類には、上記の庚申塔のほか馬頭観音や道祖神といった「石仏」に加え、石造墓標や灯籠、道標など様々な用途をもつ

た石塔が含まれている。これらの石造遺物のうち、従来、最も研究蓄積を有するものとしては石造墓標を挙げることができる。例えば考古学では坪井良平¹⁾が山城国木津惣墓墓標2,284基を対象に行った型式学的分析をはじめとして、現在各地で研究が進められている²⁾。また海外でもディーツとデスレフセン³⁾による、ニューイングランドの墓石デザインの盛行や衰退を通して、当時の人々の死生観や志向に迫る先駆的研究のほか、近年では中川正⁴⁾によるルイジアナの墓地景観から都市と農村、人種、宗教など多様な集団間での文化要素の普及、展開過程を解説する試みなどが行われている。

このように石造墓標の物質的側面に見られる流行変遷には、造立当時の社会的、文化的変化や交流の様相が、何らかのかたちで反映されている可能性を指摘することができる。坪井は先述の分析の中で、石塔形態にみられる地域的な特徴の存在についても言及し、型式学的分析を広域にわたって行うことによって、「当時の各地方の交通各地方文化圏の擴り」を明瞭にできる可能性を指摘している⁵⁾。

石造遺物の銘文史料を対象として地域的、文化的交流の解明を試みる研究はこれまでも行われており⁶⁾、関東地方では高森良昌⁷⁾による利根川流域における常夜灯の分析のほか、石山秀和、實形裕介、外山徹⁸⁾らによる

キーワード 庚申塔, 型式学的分析, 近世, 運輸機構

千葉県市原市、木更津市、君津市周辺の東京内湾地域における交流を、石造物の寄進者銘から明らかにした試みなどが挙げられる。

しかしながら、こうした銘文史料に対する研究に比べ、いわゆる石仏の物質的側面を通して、地域的、文化的交流の解明を試みる分析が行われることは稀であった。そこで本稿では、関東地方において資料的蓄積を有する近世庚申塔を事例に、銘文を用いた史料的側面ではなく石塔形態に着目し⁹⁾、石造遺物による文化交流の具体的復原の可能性について検討したい。

その際注目されるのが、江戸の石塔が地方に搬送されていたという事実である。北村和寛¹⁰⁾は、青梅市に現存する石造遺物である「新四国八十八カ所霊場碑」の造立時の状況を記録した史料をもとに、幕末における青梅街道や川越街道を利用した物資の搬送の実態を解明することを試みている。

1867（慶応3）年の「新四国八十八カ所施主緒懸扣」と題する史料には、石塔の製作地や搬送の道筋、費用などが詳細に記述されており、石塔の製作地を検討すると、約5割が江戸であった点は興味深い¹¹⁾。すなわち江戸で造られた石塔が近郊村落へむけて搬送されていたとするなら、坪井が指摘する石造遺物による地域交流の復原の可能性について、江戸とその周辺地域の石造遺物の展開を整理することによって、より具体的に検証することが可能であることを示唆している。

近世の関東地方における地域間交流については、いわゆる「江戸地廻り経済圏」¹²⁾の視点から、専ら社会経済史的側面を中心に議論がなされてきた。また近年では、文化的交流のあり方についても、川名登による利根川流域の文人の活動など興味深い知見が提示されているが¹³⁾、こうした近世流通史、交流史の領域に対して、物質的側面を用いて考古学的立場から言及した事例は極めて少ない。

そこで先述の目的に加えて、坪井による先

駆的な研究の方向性に立脚しつつ、特に江戸における石塔の流行形態の地方への普及過程を時空間的に解明することにより、江戸とその周辺地域との関係を整理してみたい。その上で型式学的分析の結果と文献史学などにおける知見との対照を行いつつ、従来、諸先学により検討されてきた流通史・経済史的課題と石造遺物研究との接点を模索するとともに、石造遺物研究による地域交流史や流通史的な研究領域への新たな位置づけを図る試みとしたい。

II. 分析方法の検討及び資料の集成

(1) 近世庚申塔の定義と研究の概略

まず関東地方における庚申塔について、言及しておきたい。庚申塔とは民間信仰の一つである庚申信仰に伴い建てられた石塔を指す。一般的には庚申待と呼ばれる徹夜を伴う行を行う信仰で、この行を60日ごとに巡ってくる庚申の日に、3年乃至7年の一定期間続けることで、行の成就がなされる。原則としてその記念に建てられる石塔が庚申塔であるとされる¹⁴⁾。

庚申塔には14～16世紀の紀年銘を持つ板石塔婆、いわゆる庚申待板碑もその範疇に含まれているが¹⁵⁾、材質や形態の面で中世と近世の庚申塔では性格を異にする資料であると考えられる。そこで今回はとくに近世の紀年銘を持つ庚申塔を「近世庚申塔」と呼び、中世の庚申待板碑とは区別して分析を行う¹⁶⁾。くわえて本稿では庚申塔の基準を設定し、①庚申信仰に基づく銘文を伴うこと、②見ざる・言わざる・聞かざるの三猿のレリーフが刻まれていること、③主尊として庚申縁起に記される「青面金剛」の像容、あるいは文字が存在するもの、以上の基準を1項目以上満たした資料は庚申塔として認識した¹⁷⁾。

次に庚申塔研究の概略を述べる。庚申信仰に関する研究は、窪徳忠による一連の研究が著名であるほか¹⁸⁾、庚申塔を含めた石造遺物

研究の流れについては、縣敏夫¹⁹⁾による詳細な論考が示されている。よって、ここでは庚申塔の石塔に関する研究に絞って、簡単に言及するにとどめたい。

庚申塔が研究対象として注目されるようになったのは明治時代以降で、山中笑²⁰⁾、三輪善之助²¹⁾といった、主に郷土史や考古遺物の民間研究者の手によって研究が行われてきた。戦後、庚申信仰研究を目的とした庚申懇話会が設立されて以降は、各地の庚申塔の悉皆調査も進み、地域的分布や数量に関する資料は豊富となった。また石川博司、清水長輝らが形態分類の定義を明確にするなど²²⁾、型式学的分類に近い作業も行われている。

特に石川は、東京都内の庚申塔数の増加傾向から、23区内に比べ多摩地区では塔の造立行為の普及が遅いことや地域によって石塔形態の比率に差異のあることを指摘した²³⁾。一部にはこうした興味深い研究があるものの、依然として形態分類の基準が不明確であるため、十分な型式学的分析が行えず、その研究方法は未だに途上の段階にあるといえる。

(2) 型式学的分析の意義と問題点

考古学における石造遺物の型式学的分析が最も盛んに行われているのは、石造墓標の分野である。先述の坪井の調査以来、今日まで多くの調査が行われているが、その分析方法として注目されているのがセリエーション分析である。日本において先駆けとなったのは横山浩一²⁴⁾で、先述の坪井による研究成果をもとに、セリエーション分析を用いて坪井の指摘していた諸型式の変化について、より明確に図化することを可能にした。

その作業過程を横山の事例から述べると、まず単位期間（10年）内に建てられた墓標について、型式ごとに塔数を集計し、各型式の割合を百分率によって標準化する。そしてその数値を棒グラフとして図化し並べていくというもので、特に紀年銘のある石造遺物で

は、時系列的に出現から盛行、衰退の過程を凸レンズ状の形で、明瞭に示することができる。

セリエーション分析の手法は、もともと北アメリカの先史学の中で用いられた手法で²⁵⁾、先に取り上げたディーツらの試みでも有効性が指摘されている²⁶⁾。流行性の高いものや経年的な変化の少ないものなど、各型式の新旧関係や並存期間を具体的に示しうる点で、考古遺物の編年研究に有益な手法として意識されているが、さらに型式学的分析によって示された地域ごとの流行変遷を比較対照していく作業を加えることによって、諸型式の普及の様相を空間的な視点から捉えなおすことも可能となる。

先述のごとく本稿が目的とするのは、庚申塔の編年ではなく、むしろ諸型式にみられる流行の普及過程を地域的に把握することであり、その点でもセリエーション分析は重要な手法であるといえる。従って、本稿ではセリエーション分析を型式学的分析の具体的な作業に据え、近世庚申塔における流行型式を対象に出現時期や出現頻度を地域ごとで詳細に把握したうえで、流行型式の時系列的変化や普及過程の地域差を顕在化したい。

ただし、分析結果を解釈するに当たって注意したいのは、従来の考古学的研究においては、文化要素の普及の方向を中心から縁辺部の地域への同心円的な拡散、伝播と捉えることが多かった。勿論、こうした文化要素の捉え方は普及過程を把握上で重要な視点であるが、齊一的で画一的な普及という単純な図式に収斂させてしまう可能性も否定できない。

中川は、アメリカ合衆国ルイジアナの墓地景観に含まれる諸要素の解読作業において、黒人と白人、カトリックとプロテスタント、都市と農村といった複数の集団を軸に、墓石の様式に見られる変遷を時空間的に捉える試みを行っているが²⁷⁾、本稿においても流行型式の普及過程を捉えるにあたっては、個々の

大分類	小分類	形態	従来呼称	分類詳細	大分類	小分類	形態	従来呼称	分類詳細
A類 塔形を呈するもの	A-1類		五輪塔	5つの部分より構成されている層塔	E類 塔身が柱状を呈するもの(柱状型)	E-1b類		尖頭丸柱型	頭部が鎌を呈し、胴部丸形
	A-2類		宝篋印塔	相輪の付いた笠層根に塔身・基礎・台座からなる層塔		E-2類		香箱型	頭部が台状に造り出されているもの
	A-3類		層塔	幾層かの塔身および層根からなる層塔		E-3a類		平頂角柱型	頭部が平滑で、胴部四角形
B類 頭部が三角形を呈するもの	B-1a類		板碑型	背面が荒彫で舟底状を呈し、前面頭部にアーチ状の窪みあるいは区画を有するもの	F類 頭部に屋根を載せるもの(笠付型)	F-1a類		笠付角柱型	入母屋形の屋根をのせ、胴部四角形
	B-1b類		板状駒型	背面が荒彫で舟底状を呈し、前面に像容を半肉彫りしたもの		F-1b類		笠付丸柱型	入母屋形の屋根をのせ、胴部丸形
	B-2類		駒型	背面が平滑で、断面が長方形を呈するもの		F-2a類		唐破風付角柱型	唐破風形の屋根をのせ、胴部四角形
C類	C類		舟型	舟形光背を呈し、像容を半肉彫りしたもの	F-2b類		唐破風付丸柱型	唐破風形の屋根をのせ、胴部丸形	
D類 正面形は方形を呈し、頭部が櫛形を呈するもの	D-1類		箱型 あるいは櫛型	背面が舟底状を呈するもの	G類				自然石
	D-2類			断面が長方形を呈するもの					
E類 塔身が柱状を呈するもの(柱状型)	E-1a類		尖頭角柱型	頭部が鎌を呈し、胴部四角形	H類				その他

図2 近世庚申塔類型概念図

表1 東京23区の型式比率と初出年次及び初出区

型式	庚申塔 基数	比率 (%)	初出年 (西暦)	初出年 (和暦)	初出区
B-1b類(板状駒型)	354	22.4	1658	明暦4年	世田谷区
C類(舟型)	286	18.1	1646	正保4年	板橋区
F類(笠付型)	272	17.2	1661	寛文元年	板橋区
B-2類(駒型)	268	17.0	1680	延宝8年	江東区・豊島区
B-1a類(板碑型)	175	11.1	1623	元和3年	足立区
E類(柱状型)	139	8.8	1659	万治2年	江東区・豊島区
G類(自然石)	22	1.4	1728	享保13年	大田区
その他	63	4.0	1626	寛永3年	目黒区(A-2類)
	1579	100.0			

羅しており、十分蓋然性を有するものと考えらる。

以上の前提を基に集成した庚申塔のデータは、パーソナルコンピュータの表計算ソフトに入力し、データベースの作成を行った。江戸や青梅市、八王子市など東京都内の庚申塔については、石川博司による優れたデータベース³¹⁾が存在し、他の地域においても行政による石造遺物の調査報告書が刊行されている³²⁾。従って、今回は基本的には、それらの資料を基に資料集成を行うことにした。

加えて、型式分類に関しては、報告書によって先に挙げた類型基準に、必ずしも合致しない分類を用いている地域も存在するため、先に掲げた類型基準を元に、各報告書に記載される分類を、今回設定した分類に読み替える作業を行った³³⁾。また幾つかの地域ではフィールドワークによる補正を行い、新たなデータベース化の作業を行っている

³⁴⁾。その詳細なデータについては、別稿を期したい。

最後に具体的な庚申塔の型式学的分析を行うにあたって、上述の分析手法における問題点について3点ほど言及しておきたい。

その一つは、現存遺物に限定した分析の妥当性である。考古資料の性質として遺物の在、不在の原因が、天変地異のほか、人為的な移動や破壊、現状での調査の粗密など様々な背景を考慮する必要がある。造立当時の様相を現状が全く反映していない可能性も考え

られる。一般的に石塔の移動や消滅理由は、道路拡張や土地開発などによることが多いが、大抵の場合は近隣の寺社などに石塔は移設されている。つまり第二の問題点とも関わるが、行政単位を基礎として大量の資料を集成し、広域的に型式変遷の過程を捉える本稿の作業においては、現存する資料でも十分に造立当時の地域的な状況を反映しうるものと考えられる。

二つ目は分析対象を現行の市区町村の範囲とすることの可否である。第一の問題とも関連するが、広域かつ大量の資料を必要とする本稿の分析において、対象地域の範囲を設定する上で旧近世村は範囲が狭く、定量的な分析を行うための適切な資料数を確保することができない。また仮に分析を行ったとしても有効な出現頻度の差異が示される可能性も低いものと考えられる。従って現行の市区町村を利用して資料集成を行うことが、より蓋然性の高い分析であると指摘できよう。

三つ目は紀年銘資料に限定する意味である。その理由は、諸型式の時間的変遷を把握する上で時間軸を必要とするからに他ならないが、その際に紀年銘資料が実際に立てられた時期を的確に示しているかどうかについては、考慮する必要があるだろう。横山は造立時期に幅のある可能性を持つ墓標において、ほぼ10年の時差を加味しておけばよいことを指摘しているが³⁵⁾、既述のように庚申塔の造立契機が仮に行の成就であったとすれば、庚申待行事の日を大幅に超えて造立される可能性は低く、単位期間としている10年という期間内で、十分誤差を吸収し得るものと考えられる。

以上の検討から、3つの問題点は、本稿における広域的かつ大量の資料を扱う分析においては、基本的には大きな障害とはならないものと考えられる。むしろ、これらの問題がまったく捨象しうるわけではなく、今後の庚申塔研究に当たって、より実証性を高めるう

えて考慮すべき問題であることに変わらないことを指摘しておきたい。

Ⅲ. 近世庚申塔に対する型式学的分析

本稿の分析において対象とするのは、東京23区1,579基、吉川市250基、上尾市133基、八王子市200基、飯能市58基、青梅市65基、北川辺町39基、都幾川村40基、妻沼町96基で、すべて紀年銘の確認および型式の比定が行える庚申塔で、総資料数は2,460基である。

図3-a～図3-iは各地域ごとに集成したデータベースをもとに、石塔形態の分類および集計を行い、10年の単位期間ごとに出現頻度をセリエーショングラフに図化したものである。図3の検討を行う際、特に注目したいのは、①流行型式の出現類型数、②流行型式の変遷順序、③流行型式の出現比率にみる上位類型の3点である。以上3点を各地域ごとに検討することにより、石塔形態にみられる流行の経年的変化の把握と、流行型式の出現比率における地域的差異の顕在化を図ることができるものとする。なお各地域の江戸からの里程数は、便宜上定めたもので、後に掲げた表2に示す文献の記載をもとにした。

東京23区 (図3-a)

東京23区における現存する最古の庚申塔は足立区正覚院の1623(元和9)年の弥陀三尊来迎像塔である³⁶⁾。足立区には1620年代の庚申塔がこの塔を含め2基見られ、型式はいずれもB-1a類である。17世紀前葉において東京23区内での主要型式はB-1a類によって占められており、庚申塔の造立が開始された当初の流行型式であったものと考えられる。この型式は石造墓標においても江戸時代初期に認められるほか、その他の供養塔としても使用されており、近世当初の江戸近郊における石造物の形態が、全般的に斉一的傾向にあったことを示す事例といえる。

東京23区において出現する流行型式は表1

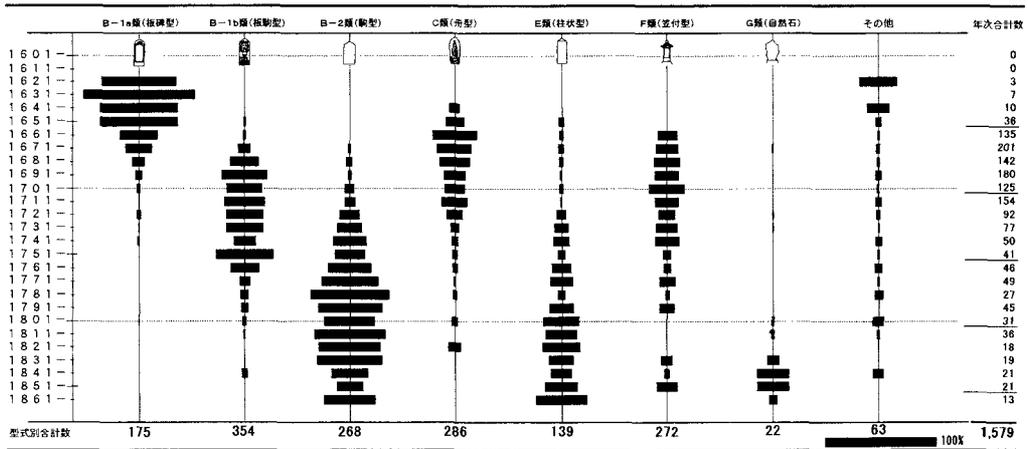


図3-a 庚申塔型式のセリエーショングラフ（東京23区）

に掲げたように7種類の類型に集約できる。その盛期を図3-aより整理すると、B-1a類（17世紀前葉～後葉）→C類（17世紀中葉～18世紀前葉）→B-1b類（17世紀後葉～18世紀中葉）・F類（17世紀後葉～18世紀後葉）→B-2類（18世紀前葉～19世紀中葉）・E類（18世紀中葉～19世紀中葉）となり、その他の型式は各年代に低い比率で認められる。これらの流行型式は、東京23区のほとんどの区部で出現が認められ、地域的な偏りは見られず、齊一的に江戸御府内とその近郊に広まっていたことが指摘できる。

次に流行型式のうち近世全体の中で出現率の高いものを指摘すると、表1に掲げたように、B-1b類（354基・22.4%）、C類（286基・18.1%）、F類（272基・17.2%）が高い比率を占めている。このうちB-1b類やC類は、図3-aのセリエーショングラフからもわかるように、消長期間が短く流行性が強い型式といえる。特にB-1b類は17世紀後葉から18世紀初頭における江戸の庚申塔造立の最盛期に出現した型式で、庚申塔の造立数が減少する18世紀末までには消滅する。

一般的に石造墓標がいわゆる舟型から箱型、柱状型へと変遷するのに対し³⁷⁾、庚申塔

ではB-1b類からB-2類、E類が主流となり、墓標と庚申塔では流行型式の変遷過程が異なっている。おそらくこのB-1b類の出現時期を境として、石造物の用途によって形態的差異が生じていた可能性も考えられるだろう。

またB-2類やE類は18世紀以降に高い比率を示す類型であるが、B-1b類と交替する流行型式として出現している。これらの流行性の強い形態の存在は、その出現時期や継続期間、出現比率など、江戸と江戸周辺地域との差異を比較検討する際に鍵になる類型と考えられる。

他方、F類は比率的に高い割合を示さないものの、近世を通して認められ、流行の存続期間の長い型式であることがわかる。東京23区において、特に杉並区、中野区、練馬区、豊島区、板橋区でF類は高い出現率を占める類型で、各区における上位1位の類型となっている³⁸⁾。こうした東京西部における特徴的傾向について、何らかの選択的な要因が存在したことも想定されるが、この点については別稿に議論をゆだねたい。

以上の流行型式に認められる特徴を踏まえて、各地域ごとのセリエーション分析の結果について、東京23区の類型数や出現頻度パ

ターンとの相違点を中心に整理してみたい。

吉川市 (図3-b)・上尾市 (図3-c)

吉川市 (6里) および上尾市 (10里) は、江戸から10里以内に位置する地域である。吉川市における最古の庚申塔は1629(寛永6)年文字塔で³⁹⁾、東京23区と造立時期は近接している。上尾市では最古の庚申塔は1659(万治2)年文字塔であるが⁴⁰⁾、東京23区や吉川市に比べると30年ほど下った時期に初期の造立がなされている。

吉川市での初出型式はB-1a類で、その

後C類→F類→B-1b類→B-2類→E類→G類と出現し、流行型式の種類数では東京23区と変わらない。また、流行型式の変遷過程も東京23区と比較して類似した傾向を示している。E類の比率が高く、B-2類の比率が少ない点が、東京23区とは異なる傾向といえる。

上尾市での初出型式はB-1b類で、B-1a類→C類→F類→E類→B-2類→G類が認められ、吉川市と同様に流行型式の種類数や変遷過程ともに東京23区と近似する。資料数の違いから出現頻度に粗密はあるが、吉

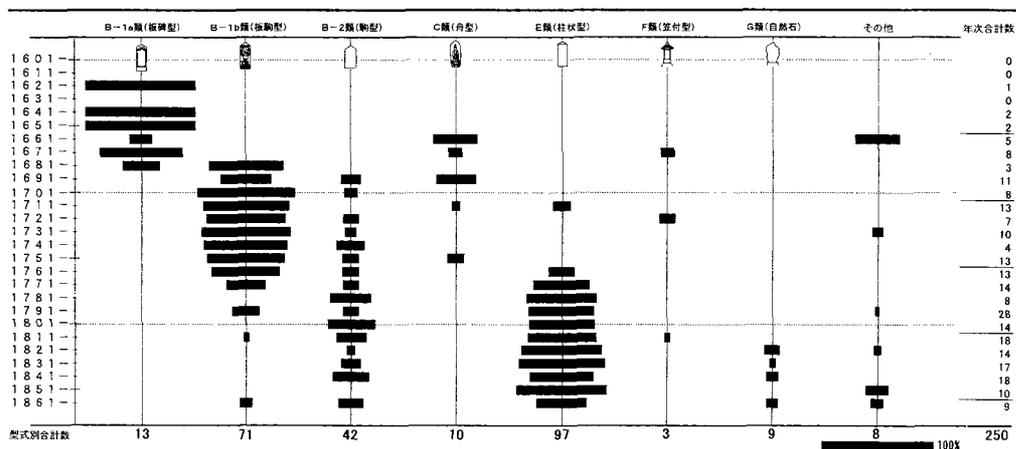


図3-b 庚申塔型式のセリエーショングラフ (吉川市)

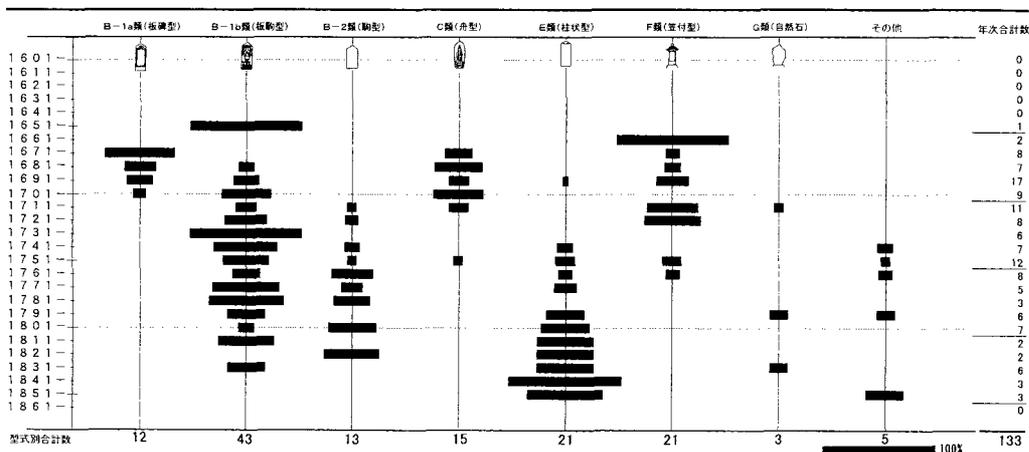


図3-c 庚申塔型式のセリエーショングラフ (上尾市)

川市，上尾市の流行型式の出現頻度パターンは，東京23区の傾向と類似した傾向を示しているものと指摘できる。

両地域の地理的な特徴としては，吉川市は江戸川，中川などの河川とそれに伴う河岸が存在し，上尾市も入間川と荒川の合流地点に平方河岸が位置していることから，物資輸送において，河川水運が大きな役割を果たした地域といえる。また上尾市は中山道が縦貫し，交通の利便性は陸上，河川ともに良好な地域であった。こうした物資輸送の利便性や江戸との距離が近いことなどが，流行型式の変遷過程にみられる東京23区との類似性にも影響を与えている可能性が指摘できよう。

八王子市（図3-d）・飯能市（図3-e）・青梅市（図3-f）

八王子市（11里半）・飯能市（13里）・青梅市（13里半）はいずれも江戸から15里以内に位置する地域である。八王子市の現存する最古の庚申塔は，1681（延宝9）年の青面金剛像塔でC類である⁴¹。八王子市には1628（寛永5）年銘で，「為庚申待供養奉待十二人者也」と刻まれた定印弥陀坐像の懸仏が存在し⁴²，また庚申待の文言が銘文として刻まれた1660（万治3）年の梵鐘も存在している⁴³。これら

の資料の存在から，八王子市の庚申信仰は早い時期から展開していたものと考えられるが，庚申塔の造立時期は江戸に比べ約60年の開きがあり，庚申塔の造立開始が遅れる地域的な要因が存在した可能性が考えられる。

飯能市では現存する最古の庚申塔は1668（寛文8）年の聖観音像塔でB-1b類であり⁴⁴，青梅市の最古の庚申塔は1670（寛文10）年の文字塔でB-1b類である⁴⁵。いずれも八王子市に比べ造立年次は早く，初出型式はB-1b類となっている。

流行型式の出現傾向は八王子市ではC類→F類→B-1b類・E類→G類→B-2類であるのに対し，飯能市はC類→B-1a類・B-1b類→F類→B-2類→E類→G類で，C類，B-1a類などの順序が異なるものの東京23区と概ね類似した変遷順序を示している。また青梅市もB-1a類→B-1b類→C類→F類→E類→B-2類→G類で，東京23区とは各型式の出現順序は類似している。

八王子市における型式の種類数は6種類で他の2市の7種類に比べ少ない。また，B-1a類が見られないほか，E類とF類の出現期間が長く，特徴的な傾向を示している。近世を通じて八王子市の庚申塔は，E類とF類の2つの型式でほぼ占められているが，特に

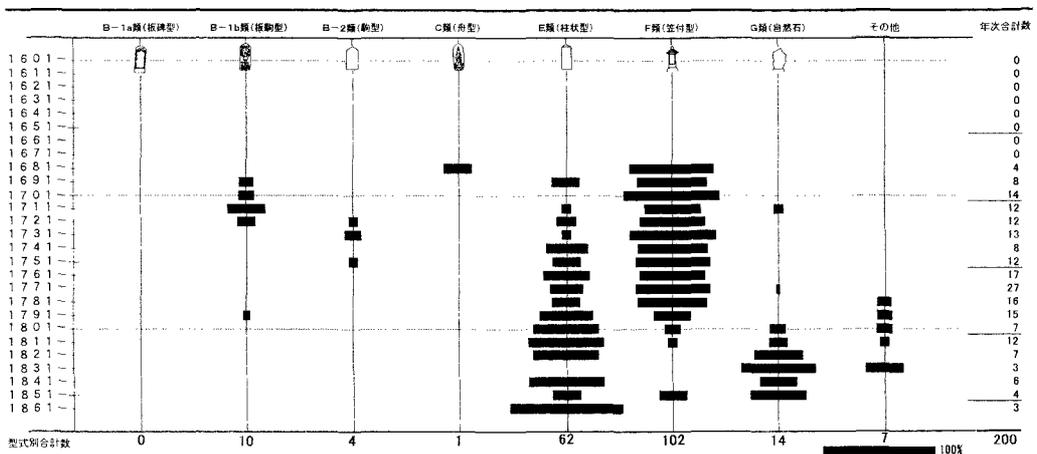


図3-d 庚申塔型式のセリエーショングラフ（八王子市）

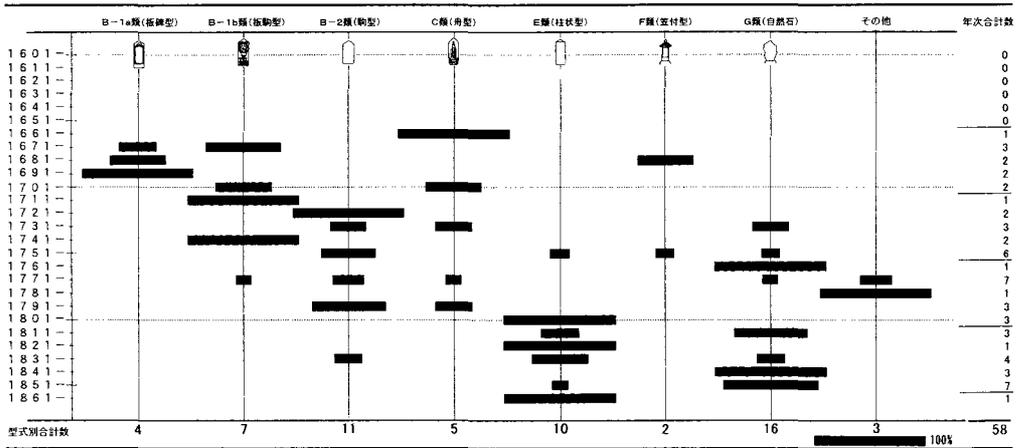


図3-e 庚申塔型式のセリエーショングラフ（飯能市）

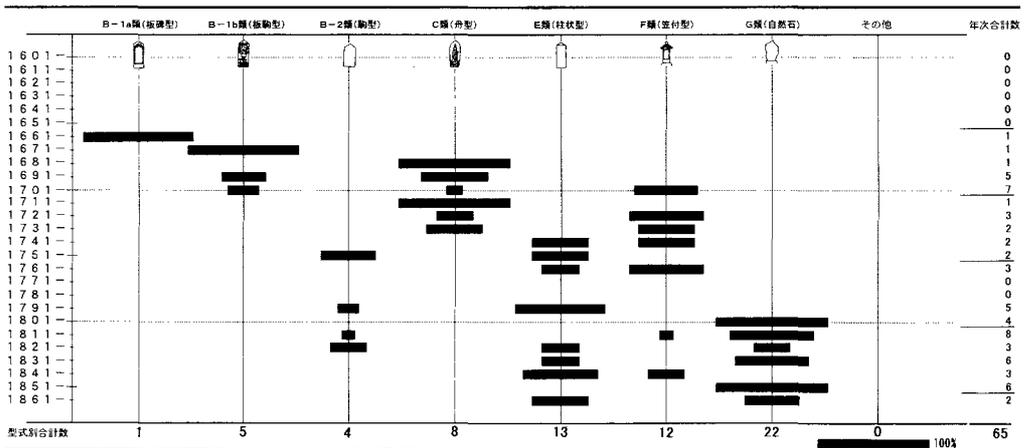


図3-f 庚申塔型式のセリエーショングラフ（青梅市）

F類の出現頻度は青梅市の12基や飯能市の2基と比べ多い傾向にある。しかし、18世紀後半以降の傾向では八王子市でもE類が増加し、飯能市、青梅市の傾向および東京23区の傾向は一致するようになる。つまり18世紀前半までと18世紀後半では、八王子市における庚申塔の造立行為に何らかの性格的な違いが存在する可能性が推測される。

3市はいずれも地理的には水運に適した河川に遠く、駄馬などによる陸上輸送が主体の地域であった。ただし八王子市は甲州街道が横断し、青梅市も青梅街道の終着であったこ

とから、陸上運輸が発達した地域といえ、加えて青梅市は新河岸川経由での江戸との交流も認められる⁴⁶⁾。このような運輸形態の特性が、流行型式の出現頻度に影響を与えていた可能性を示唆していると言えよう。

北川辺町(図3-g)・都幾川村(図3-h)・妻沼町(図3-i)

北川辺町と都幾川村はいずれも江戸から17里に位置し、妻沼町は19里に位置する。3町村ともに、江戸からの距離は20里以内の地域に位置している。現存する最古の庚申塔は北

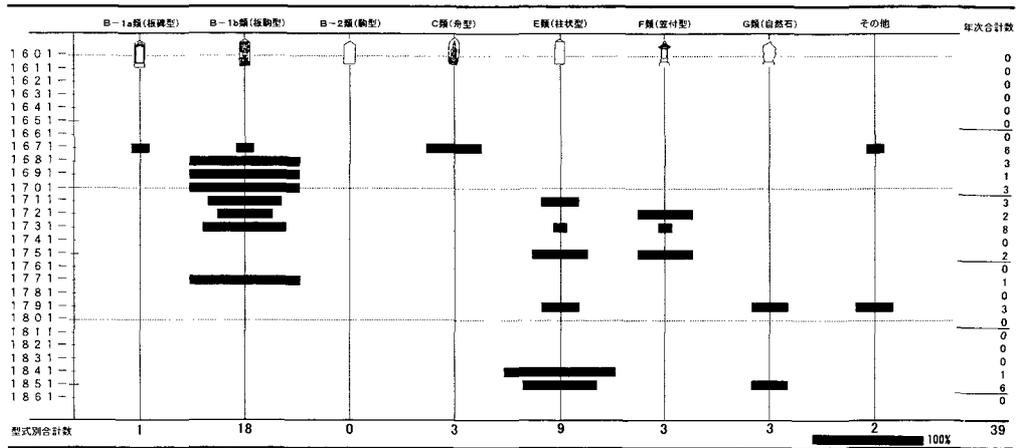


図3-g 庚申塔型式のセリエーショングラフ(北川辺町)

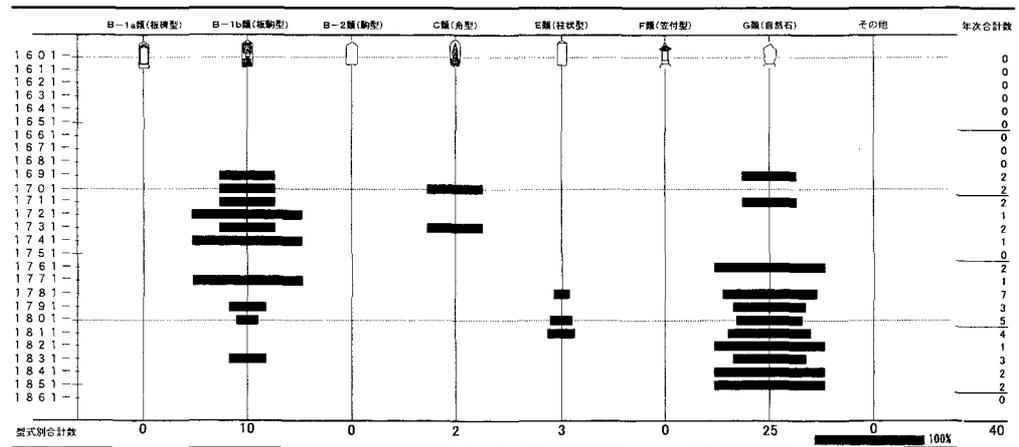


図3-h 庚申塔型式のセリエーショングラフ(都幾川村)

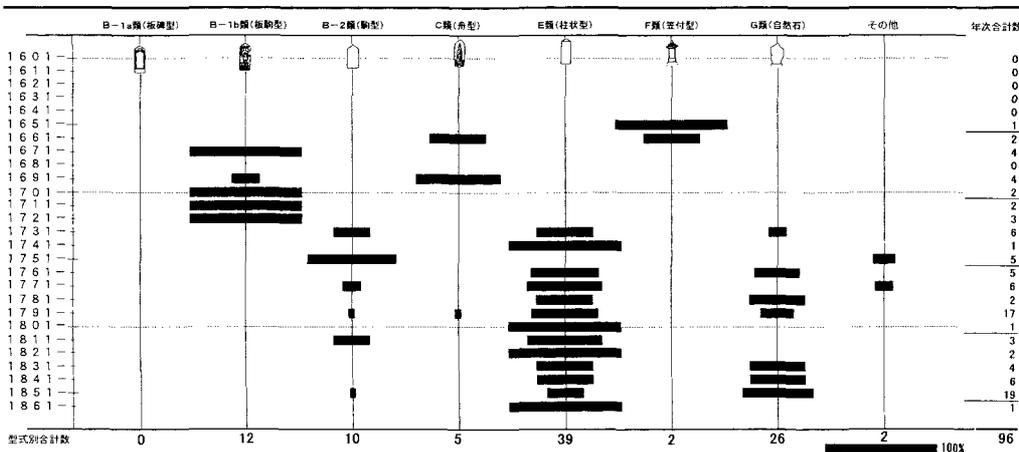


図3-i 庚申塔型式のセリエーショングラフ(妻沼町)

川辺町では1672(寛文12)年文字塔でB-1a類である⁴⁷⁾。都幾川村は1694(元禄7)年の青面金剛像塔でB-1b類⁴⁸⁾、そして妻沼町は1660(万治3)年に造立された文字塔でF類である⁴⁹⁾。

流行型式の出現過程は北川辺町ではB-1a類・B-1b類・C類→E類→F類→B-2類・G類で、その他の類型も少数認められる。都幾川村では、B-1b類・G類→C類→E類で、B-1a類やその他の類型は確認されていない。そして妻沼町ではC類・F類→B-1b類→B-2類→E類→G類で、その他の類型は少数確認されているが、B-1a類はみられない。

3町村における流行型式の出現頻度パターンを比較すると、北川辺町と妻沼町では東京23区で示された傾向と類似した点を確認することができる。特に17世紀後半から18世紀前半の東京23区ではB-1b類・C類が主体となっているが、北川辺町では18世紀前半においてB-1b類の占める比率が高く、19世紀前半でもE類の占める割合が高いなど、東京23区の傾向に近似している。ただし出現頻度パターンはB-1b類やE類に偏重する傾向が指摘できる。また妻沼町ではB-1a類は存在しないものの、B-1b類やC類、F類などが認められ、出現頻度のパターンも東京23区と類似している。

一方、北川辺、妻沼両町に比べ、都幾川村での流行型式は、類型数が4種類と少ない。また主要な流行型式は、18世紀を通じてB-1b類が大半を占め、その後19世紀前半にはG類となるなど、流行型式はほぼ2種類に集約されていると指摘できる。

北川辺町、妻沼町はいずれも利根川流域に位置する町であり、北川辺町は渡良瀬川と利根川との分岐点にも近く交通の要衝である。また妻沼町には近世当時、上州新田街道の渡船場があり、河岸と共に繁栄したという⁵⁰⁾。これに対して都幾川村は山間部に位置し、水

運に適する河川は存在していない。こうした3町村の地理的特性を考慮すると、江戸から20里前後離れた地域では、運輸形態の差異によって地域差が一層顕著に認められることが指摘できる。

以上のように庚申塔の流行型式の変遷過程を空間的に整理していくことで、石造遺物における型式の地域的な展開を明らかにできる可能性が見えてきた。特に一連のセリエーショングラフの検討からは、流行型式の出現頻度パターンに明瞭な地域差が認められ、このような流行型式の普及過程を地域的に解き明かすことによって、江戸と周辺地域との交流の実態についても迫りうる可能性が期待される。そこで次章では、地域差について整理を行い、その上で差異が生じる要因とその歴史的意味について検討を試みたい。

IV. 近世庚申塔による地域交流史の復原

(1) 庚申塔の流行型式にみる地域差

今回のセリエーション分析では、庚申塔の主要な流行型式として7種類の類型を取り上げた。東京23区内の資料についてみると、7種類の型式の変遷はいずれも出現から盛行、消滅のパターンを示し、とくにB-1a、B-1b、B-2、C、G類などは、消長の期間が短く流行性の高い類型であるのに対して、E、F類は消長期間の長い持続的な傾向を示す類型として捉えることができる。

ここで各地域における流行型式の類型数を検討すると、八王子市、都幾川村、妻沼町を除いた市町村では東京23区と同数の類型が確認され、7種類の庚申塔の類型が、東京23区のみならず旧武蔵国内の各地にも展開していたことが指摘できる。また類型が7種類に達しなかった地域でも、7類型以外のその他の型式の比率は低く、基本的に7種類の範囲内に収束している。つまり庚申塔の型式は、東京23区での類型数の7類型以上に多様化することはなく、型式のヴァリエーションは齊一

的傾向を持っていたことが指摘できる。

次に流行型式の出現頻度パターンを通して型式の交替過程について検討すると、吉川市や上尾市のセリエーショングラフにおいては、B-1a類からB-1b類やC類へ移行し、B-2類あるいはE類へと交替していく過程が認められる。さらに分析対象地域の中で最も遠隔地に位置する妻沼町でも同様の傾向が示され、B-1a類が存在しないことを除いて、基本的な変遷パターンは東京23区と一致している。ただしG類の出現時期や比率が東京23区と異なるが、G類については図3の各地の傾向から認められるように、江戸から遠隔の地域で出現比率が高く、江戸との距離差に関係した地域的特徴と考えられる。

一方、特定の型式に偏重するなど、他型式への交替が頻繁には行われない地域も存在し、飯能市ではB-1a類が他の分析対象地域より長く残存するほか、北川辺町や都幾川村でも、B-1b類が長期にわたり出現している。また八王子市でもF類が、いずれの分析対象地域よりも高い比率を示している。

以上の検討から流行型式の出現頻度パターンをもとに各地域を区分すると、①吉川市や上尾市、妻沼町のように東京23区に類似した流行型式の交替が行われる地域と、②八王子市や北川辺町、都幾川村といった特定の型式が持続し、型式の交替が頻繁に行われなかった地域、そして③青梅市や飯能市など、東京23区の流行型式の出現が認められるが、出現頻度パターンの差異に特徴を持つ①と②の中間的傾向を持つグループ、の3つのグループに分類できる。

このうち①と②の区分にまとめられた地域の江戸との位置関係を整理すると、①のグループには吉川市、上尾市など江戸からの里程が10里以内に位置する地域のほか、江戸からの距離が15里を超える19里の妻沼町が含まれるが、②のグループには江戸との距離が11里半で上尾市と大差ない八王子市や15里の北

川辺町と都幾川村などが含まれ、単純な江戸と各地域との同心円的な距離だけによって、グループ化の要因を説明することはできないことが分かる。

表2は今回分析対象とした市町村内に位置し、年貢米の搬送に用いた河岸の存在を記した文書史料が確認できる近世村落を対象として、表にまとめたものである。なお津出河岸の項は表記に異同があるため適宜、表現を改めた箇所がある。

表2の記述より、各地域の物資の運輸形態に着目して各グループについて検討すると、①のグループは、主に荒川や利根川、江戸川などに近接し、河川輸送が発達していた地域であることが指摘でき、一方、②のグループは、八王子市や都幾川村など水運に適した河川がなく、主に陸上輸送が利用されていた地域であったことが考えられる。ただし北川辺町は利根川に近接しており、その他の地域とは性格を異にしているが、この点については第2節において議論したい。そして③のグループは近接する河川はないが、新河岸川を経由した津出しが行われるなど、物資輸送では水運と陸運が併用されていた地域であると考えられる。つまり基本的には各グループの差異は運輸形態の違いに基づいているものと言え、流行型式の出現頻度パターンに認められる地域差の要因として、物資輸送の運輸形態が関係しているものと指摘できる。

しかしながらここで再考しておかねばならない点として、一連の議論は江戸の流行型式が地方へ普及したことを前提としており、その真偽を検証する必要がある。そこで次節では、各地域において庚申塔の造立が開始された時期の流行型式の地域的な展開について整理することから、江戸の流行型式の普及の可能性について検証したい。

(2) 流行型式の普及と運輸機構の整備

図4は分析対象地域における1621年から1700

表2 分析対象地域の初出庚申塔型式と江戸への里程

分析対象市町村名	陸路 (日本橋迄)	初出型式	造立年 (西暦)	造立年 (和暦)	史料掲出 近世村名	津出河岸 (河岸迄の距離)	主要 河川	川路 (漢字記載)	史料	掲載頁 ※1
吉川市	6里	B-1a類	1629	寛永6年	中曾根村	居村河岸	中川	8里半	嘉永五年葛飾郡中曾根村差出明細書上帳	488-492
上尾市	10里	B-1b類	1659	万治2年	上尾宿	平方河岸 (1里)	荒川	23里	元文二年足立郡上尾宿御書上	104-110
八王子市	11里半	C類	1681	延宝9年	横山宿	なし	—	—	弘化二年正月甲州道中横山宿	※2
飯能市	13里	B-1b類	1676	延宝4年	真能寺村	新河岸 (5里)	新河岸川	20里	明和四年高麗郡真能寺村村明細帳	126-128
青梅市	13里半	B-1b類	1670	寛永10年	西分村	なし	—	—	明和五年村鑑書上帳子三月 多摩郡西分村	※3
北川辺町	17里	B-1a類	1772	寛永11年	麦倉村	当村河岸	利根川・ 江戸川	32里	明和四年埼玉郡麦倉村村鑑明細帳	385-389
都幾川村	17里	B-1b類	1694	元禄7年	瀬戸村	新河岸 (7里)	新河岸川	20里	明和元年比企郡瀬戸村村明細帳	185-188
妻沼町	19里	F類	1660	万治3年	妻沼村	村内に有	利根川・ 江戸川	35里	『新編武蔵風土記稿』 「幡羅郡之四 妻沼村」	※4

※1 小野文雄編『武蔵國村明細帳集成』1977、武蔵國村明細帳集成刊行会。

川路の補足として、埼玉県編・発行『新編 埼玉県史 資料編15 近世6 交通』、1984、155～158頁を参照。

※2 八王子市市史編さん委員会編『八王子市史 附編』、八王子市、1980(初版1963)、331～341頁。

※3 青梅市郷土博物館編『青梅市市史史料集』26、青梅市教育委員会、1980、13～14頁。

※4 新編武蔵風土記稿刊行会『大日本地誌大系 新編武蔵風土記稿 第11巻』、雄山閣、1967、208～213頁。

年までの庚申塔を対象に、年次別で出現頻度を百分比の棒グラフによって示し、その結果を江戸からの里程ごとに並べ直したものである。東京23区と吉川市で庚申塔の初出資料が認められて以降、江戸との距離が近い地域から庚申塔の造立が行われていく過程が認められる。しかし江戸との距離差と造立の開始時期が単純に関係しているわけではなく、江戸から約11里半の八王子市が東京23区の初出から約50年、妻沼町とも約20年遅れていることや、距離的には江戸と同一距離に位置する北川辺町と都幾川村で20年近い差が生じていることは注目される。

ここで東京23区に現存する資料が示す7類型の初出年は表1に示したが、表2に掲げた分析対象地域の現存する最古の庚申塔造立年と型式と比較すると、妻沼町でF類が1659(万治元)年に造立されている点を除き、いずれの地域も、最古の庚申塔の型式は、江戸において既に出現した類型であることが分かる。またF類については、石造墓標として既

に江戸での使用事例が確認されていることから、各地で確認された庚申塔の石塔型式のうちで、江戸の石塔型式に先行している事例は存在しないと指摘できる⁵¹⁾。

ただし、東京23区における庚申塔の初出は、既述したように足立区正覚院の資料であり江戸御府内ではなく、正確には江戸近郊農村を発祥とした可能性が推測される。しかし、石仏研究者の間では経験的見地から、東京東北部から古利根川流域において、初期の庚申塔の増加が認められ、その背景には江戸御府内の石工の活動が少なからず影響していた可能性が指摘されてきた⁵²⁾。この点を検証するためには江戸を製作地とする石塔の地域的な展開について、石造物が製作された場所を銘文や史料などから特定することが必要といえる。

そこで今回は、分析対象とした地域において、近世庚申塔およびその他の石造遺物に刻まれた石工銘を抽出したところ、江戸在住の石工銘は上尾市や飯能市、都幾川村などで確

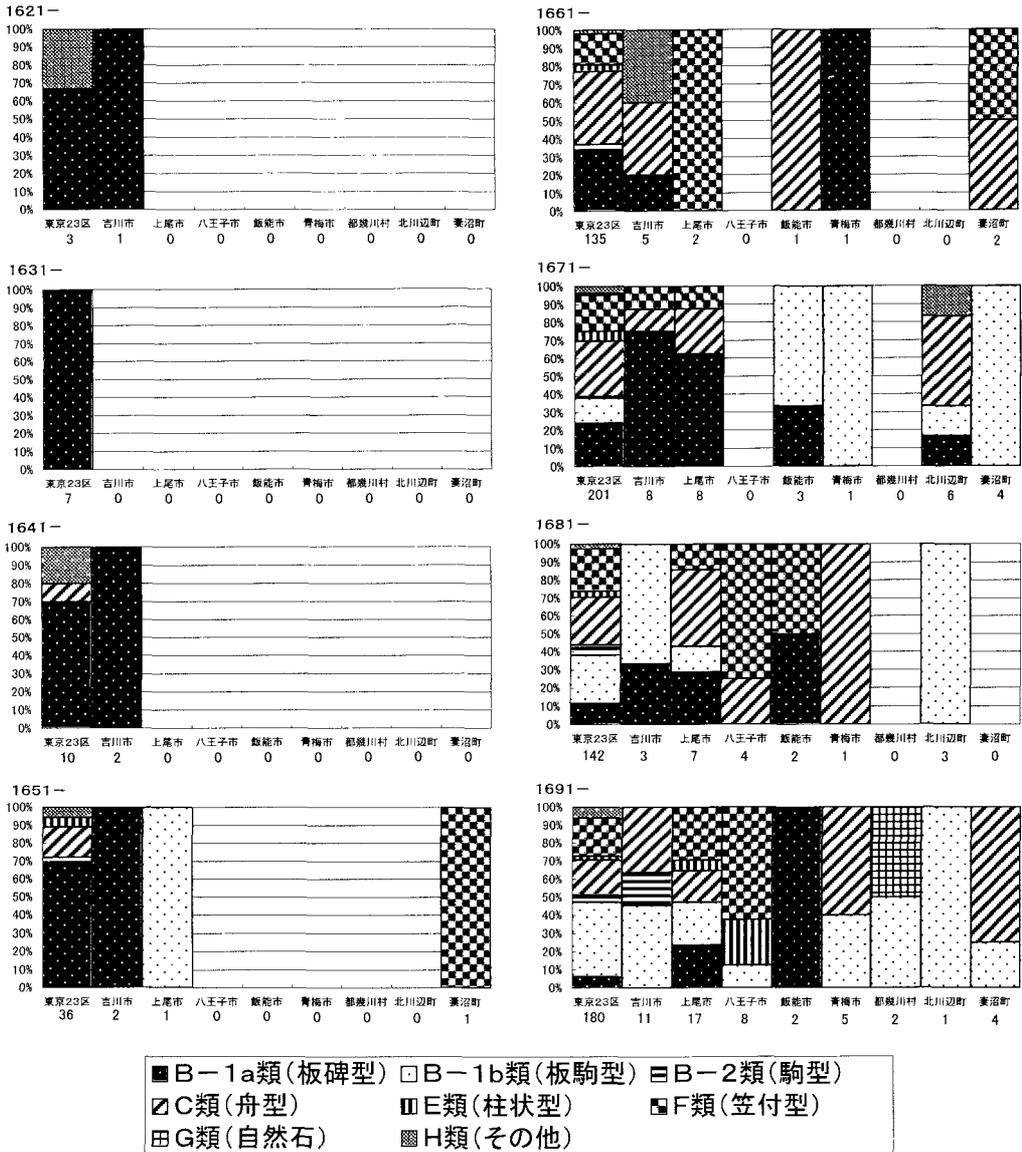


図4 1621～1700年における庚申塔の型式変遷百分比グラフ

※ 行政地域名の下段の数字は資料数。

認められ、また在地の石工銘や在所の記載のない渡りあるいは在地の石工と推測される石工銘が認められた⁵³⁾。

石工の行動範囲については、従来の石造遺物研究のなかでも注目されており、特に渡りの石工の行動については高遠石工の活動を中

心に諸先学の考究がある⁵⁴⁾。しかしながら江戸石工については、未だ解明されているとは言えず、文書史料においても江戸石工の活動について示すものは数少ない⁵⁵⁾。今後の検討課題の一つといえよう。

他方、江戸で製作された石塔が各地へ搬送

された可能性については、冒頭にも触れた青梅市の文書史料に詳しい記載があり、相当数の石塔が江戸で造られ、かつ搬送されていたことが理解できる。

加えて萱野章宏⁵⁶⁾は、旧上総国の望陀郡および周准郡の付近に存在する石造物の石工銘の分析を通じて、とくに寛文期から享保期においては主要港であった木更津村を中心に石工が活動し、江戸からも直接、石塔が搬送された可能性が高いことを指摘している⁵⁷⁾。

吉原健一郎⁵⁸⁾は石材の流通に関して、荷主から石問屋、そして仲買である石工見世持、そして石工へという基本的な流れを指摘しているが、石塔の完成あるいは半完成品についても、何らかの流通機構が存在していたものと考えられる⁵⁹⁾。

そこで石造物の流通の視点から物資輸送に用いられた利根川や江戸川の整備過程に目を向けてみると、興味深い点が明らかとなる。利根川が現在のような銚子口への流路に確定したのは、17世紀中葉のことである⁶⁰⁾。利根川流域には多くの河岸が存在し、その実態については諸先学の論考に詳しいが、近世における河岸の成立要因について、川名登が次のような指摘をしている。すなわち河岸が成立する背景には、江戸への年貢米の輸送があり⁶¹⁾、文禄から寛永期にかけては領主による河岸の創設が積極的になされた。その後、年貢米を含め物資輸送が、寛永から慶安期には河岸問屋の手を経て行われるようになったとされ⁶²⁾、寛文期(1661~1672)までには、運輸機能を備えた河岸が成立したものと指摘している⁶³⁾。

この寛文期は、妻沼町や北川辺町など利根川流域の地域で庚申塔が造立されるようになった時期と重なっており⁶⁴⁾、河岸の成立と庚申塔の造立には何らかのつながりがあった可能性が示唆されている。特に妻沼町は先述したように水運と陸運の結節点であり、交通の要所である。すなわち北川辺町と妻沼町に

おいて見られた庚申塔の造立時期が20年ほどずれることや流行型式の出現頻度パターンに認められる差異は、そうした物資流通における地域的役割の違いが背景としてあったことも推測される。

つまり、本章第1節で各地域を流行型式の出現頻度パターンから3つにグループ化した際に、北川辺町は利根川に近接した地域でありながら、②の陸上交通を主体とした地域と同じグループに区分された理由も、上述のように北川辺町の範囲内に物資流通の大きな拠点を持たないことが、影響していた可能性も考えられる。そのほか、庚申信仰の内容の違いや経済的要因など、今後さらに検討を要する課題も多いが、そうした様々な地域的な要因から、選択される流行型式が多様にはならず、陸上交通主体の地域と同様に、特定の型式に偏重した江戸とは異なる特徴的傾向を示すことにつながったものと考えられる。

以上、利根川流域における庚申塔の存在は、流通拠点としての河岸の発展と安定を迎えた時期を反映した一つの事例としても見ることができ、流通体系の整備や経済的安定といった要素が、庚申塔の造立行為の普及にも大きく影響を与えていたことが推測される。

ここで本節での議論を整理すると、①東京23区での流行型式の初出年を各分析地域の資料は遡ることがない。②東京23区の傾向、つまり江戸近郊の流行型式が、江戸周辺地域の初期の造立型式に影響を与えていた可能性がある。③石工銘や文書史料からは在地の石工の活動は認められるものの、多数の江戸の石塔が地方へ搬送されていた可能性が高い。④東京23区の傾向との類似度を決定しているのは、基本的には運輸形態の差異に基づく江戸との関係の粗密にあると解釈できる。⑤利根川流域では河川整備と運輸機構の成立が庚申塔の造立時期に重なる、以上5点が指摘できる。

①~③の各点をあわせて考えるなら、型式学的分析から認められた庚申塔の流行型式の

齊一的な広がり、基本的に江戸の流行型式が普及した可能性を示すものと指摘でき、④及び⑤の点からは、流行型式の出現頻度に認められる地域性の要因として、運輸形態の差異や運輸体系の整備の時期、または物資流通上の地域的役割や村落基盤の安定など、地域ごとで様々な地理的、社会経済的要因が背景として考えられることを示唆している。

江戸周辺の流通体系としては、「江戸地廻り経済(圏)」の存在が指摘されてきたが、このシステムが確立するのは近世中期、元禄から享保年間(1688~1736)と言われている⁶⁵⁾。本稿での庚申塔の流行型式の展開を見る限り、江戸の流行型式の普及は、1660年代以降、江戸周辺地域において顕著に認められる。仮にこうした石造物を商品として捉えるなら、江戸と周辺地域との運輸・流通機構の整備、完成の時期も存外早い可能性を示唆しているといえるのではないだろうか。

V. おわりに

近世庚申塔に対する型式学的分析を試みた本稿での作業は、流行型式の普及とその展開過程を、セリエーショングラフの利用を通して、より明瞭に時空間的に跡づけることができた。その結果導き出された流行型式に見られる出現頻度パターンからは、江戸と周辺地域との関係性を示す類似と地域差が存在し、その要因には江戸と地方との距離差や運輸形態の違い、さらには流通機構の形成といったいくつかの要因が重層的に関与し影響を与えていることを指摘した。

庚申塔の流行型式にみられる江戸から周辺の農村への普及過程は、石塔の搬送にせよ、石工や情報の移動にせよ、文化的要素の普及形態としては、一般的な傾向として捉えることができる。しかしその一方で、江戸との距離差が流行型式の普及に単純には影響しておらず、運輸形態や流通システムの確立時期が異なる地域で差が認められたことは、石造遺

物の流行型式が普及するにあたって、多様な要素が関係していたことを示している。

これまで石造墓標の分析においては、江戸周辺の型式変遷過程の齊一的傾向が指摘されていた⁶⁶⁾。今回の庚申塔の分析においても出現類型数では齊一的傾向が見られたが、とくに流行型式の出現頻度に地域差が認められたことは興味深い。今後、石造遺物の流行型式にみられる普及過程を検討していくことが、江戸近郊の石造遺物の多様な展開過程を動的に解明していく上で、有効な研究視角になり得ることを示し得たといえよう。

ただし一連の議論は、庚申塔の普及という側面を軸に考古学的視点から展開したものであって、今後さらに重層的な地域交流のあり方を復原する際には、文献史料やその他の石造遺物など、多角的な視野を踏まえて人的・経済的交流の実態を検討することが、より実証性を高める上で重要になるものと考えている。また流通史をはじめ関連する近世史の諸領域に対して、未だ十分な配慮が行い得たとは言い難く、今後の課題としたい。

そのほかに興味深い課題としては、微視的な地域交流の実態を捉える視点も挙げられる。例えばF類をとりあげると、甲州街道沿いのF類の比率が高いことは指摘されているが⁶⁷⁾、八王子市とその近郊に隣接する青梅市や飯能市、都幾川村の4地域を比較した場合、飯能市や青梅市に比べ、都幾川村にはF類がほとんどなく、その影響は小さい。こうした近接した地域における特定型式の考古学的分析を通して⁶⁸⁾、小規模な地域的まとめや石工の行動範囲などを捉え得る可能性についても、今後検討していきたい。

これまで近世考古学は他分野との接点をつなぐ研究可能性を模索する努力を等閑視してきた感がある。今後は文献史学や民俗学その他関連諸学と切り結び、新たな研究領域を生み出していくことが期待される。その試みの一つとして石造遺物を素材に歴史地理学的視

点を採り入れ、地域交流史、流通史へのアプローチを模索した本稿の作業が、従来の諸先輩による学問的蓄積に、新たな切り口と知見を加え、江戸近郊の地域史に関するより深化した理解につながることを期待したい。

(慶應義塾大学・院)

【付記】

本稿は1998年度慶應義塾大学大学院文学研究科に提出した修士論文の一部と平成13年7月に開催された第44回歴史地理学会大会において行った発表内容をもとに加筆、修正したものである。学会発表においては、会員諸氏に多くのご教示を賜った。また日頃ご指導いただいている鈴木公雄先生をはじめ慶應義塾大学民族学考古学研究室の諸先生、先輩、後輩諸氏にも多くのご教示を賜った。加えて英文要旨の作成にあたっては、カリフォルニア大学パークレー校の羽生淳子氏にご校閲を頂いた。なお本稿は平成12年度慶應義塾大学大学院高度化推進研究費助成金並びに平成13年度科学研究費補助金(特別研究員奨励費)、日本学術振興会特別研究員制度に基づく研究助成による研究内容を含んでいる。記して感謝の意を表したい。

【注】

- 1) 坪井良平「山城木津惣墓標の研究」, 考古学10-6, 1939, 310~346頁。
- 2) 日本各地の石造墓標の展開については、谷川章雄「近世墓標の類型」, 考古学ジャーナル289, 1988, 26~30頁に詳しい。
- 3) Deets, James, and Dethlefsen, Edwin. S. "Death's heads, chemb, and willow," *Natural History Magazine* 76-3, 1967, pp. 28-37.
- 4) 中川正『ルイジアナの墓地—死の景観地理学—』, 古今書院, 1997。
- 5) 前掲1) 345頁。
- 6) 例えば、位野木寿一は四国金比羅参詣の参道に設置された灯籠を対象に、街道沿いで分布状況や寄進者の多様な国名を検討し、参詣に使用された街道の盛衰や全国に広がる人的交流を復原した。位野木寿一「金比羅
- 7) 高森良昌「利根川下流域の常夜灯」(利根川文化研究会編『利根川・荒川流域の生活と文化』, 国書刊行会, 1995), 47~93頁。
- 8) 石山秀和・實形裕介・外山徹「石に刻まれた文化交流—石造物の寄進名から」, 袖ヶ浦市史研究5, 1997, 81~108頁。
- 9) 筆者は既に、庚申塔の銘文史料を用いて村落社会の変容を捉える試みを行い、その研究可能性について指摘した。拙稿「近世庚申塔にみる施主名称の史的変遷—江戸周辺農村における近世前期の一樣相—」日本宗教文化史研究4-1, 2000, 124~152頁。
- 10) 北村和寛「江戸から青梅街道への物資搬送—鋳物と石造物を例に—」, 交通史研究47, 2001, 41~52頁。
- 11) 内訳は88基中、四ッ谷32基, 神田7基, 中野13基, 柳沢(現, 西東京市)31基, 不明5基。前掲10) 46頁。
- 12) 「江戸地廻り経済(圏)」形成に関する研究史の概要については、伊藤好一「江戸地廻り経済の形成と関東農村」(村上直編『関東近世史の研究』名著出版, 1984), 220~232頁を参照。
- 13) 利根川流域における社会・文化的交流については、①川名登『河岸に生きる人々 利根川水運の社会史』, 平凡社, 1982。②川名登『河川水運の文化史 江戸と利根川文化圏』, 雄山閣出版, 1993。前掲7)を参照。
- 14) 庚申塔の造立契機については、3年乃至7年間にわたる行の成就以外にも、結衆の結集など様々な要因が指摘されている。窪徳忠「附章 庚申塔と塚」『新訂庚申信仰の研究 下巻』(窪徳忠著作集2), 第一書房, 1996, 277~315頁。
- 15) 小花波平六「庚申待板碑」, 考古学ジャーナル132, ニューサイエンス社, 1977, 21~23頁。
- 16) 本稿における近世は、所謂江戸時代を指し、具体的には西暦1603年~1868年を当てている。
- 17) 庚申信仰に伴う石造遺物には、灯籠や手水鉢なども含まれるが、今回は庚申信仰の宗

- 教的要素が明確に把握できるもののみを庚申塔として取り上げるものとした。既存の定義については①清水長輝『庚申塔の研究』, 名著出版, 1988, (初版 1959 大日洞), 8~9頁, および②石川博司「庚申塔の範囲基準」, 庚申43.1967, 18~25頁を参照。
- 18) 窪 徳忠「庚申信仰研究の回顧と展望」庚申懇話会編『庚申 民間信仰の研究』, 同朋社, 1978, 2~15頁参照。
- 19) 縣 敏夫「石仏研究史」(庚申懇話会編『石仏研究ハンドブック』, 雄山閣, 1985), 11~57頁。
- 20) 山中 笑『共古随筆』(『山中共古全集』日本書誌学大系46(2) 青裳堂書店, 1985), (初版 1928, 温故書店), 108~149頁。
- 21) 三輪善之助『庚申待と庚申塔』第一書房, 1985 (初版 1935, 不二書房)。
- 22) 一連の庚申塔の形態分類については, 前掲17) ①, ②および石川博司「庚申塔の塔形分類」庚申54, 1969, 20~24頁に詳しい。
- 23) 石川博司「市内の庚申塔」(青梅市教育委員会編・発行『青梅市の石仏』, 1974), 35~76頁。
- 24) 横山浩一「型式論」『1 研究の方法』(岩波講座日本考古学), 岩波書店, 1985, 44~78頁。
- 25) Rouse, Irvhg “Seriation in Archaeology,” *American historical anthropology: Essays in honor of Leslie Spier, L. Riley and Walter W. Taylor, eds., Southern Illinois University Press, 1967, pp.153-195.*
- 26) 前掲3) 及び, 墓石のセリエーション分析としては Deets, James, and Dethlefsen, Edwin. S, “The Doppler effect and archaeology: A consideration of spatial aspect of seriation,” *Southwestean Journal*, 1965, pp.196-206がある。
- 27) 前掲4) 177~217頁。
- 28) 前掲17) ①20~24頁。
- 29) 前掲17) ②参照。
- 30) 谷川章雄による近世墓標の分類を基にした。前掲2) 26~27頁。
- 31) ①石川博司『東京区部庚申塔 DB』, ともし会, 1995, ②石川博司『東京多摩庚申塔 DB』, ともし会, 1995。
- 32) ①吉川市教育委員会編・発行『吉川市の石塔』(史料調査報告書第1集), 1998。②上尾市教育委員会編・発行『上尾市の庚申塔』, 1996。③飯能市教育委員会編・発行『飯能の石仏』, 1989。④北川辺町史編さん委員会編・発行『北川辺町の石仏』, 1977。⑤都幾川村史編さん委員会編・発行『都幾川村史料集6(1) 文化財編 石造物I』, 1993。⑥奈良原春作『妻沼町の庚申塔』, 妻沼町文化財保護委員会, 1975。及び前掲23)。
- 33) 図2に示した従来分類と今回の類型を対比しつつ, 再度分類を行ったが, 前掲32) ①の吉川市の場合, 「舟型光背」として分類している資料の中には, 「B-1b類」と「C類」に正面形態から区別できる資料が含まれており, そうした報告書の記載については, 写真や実測図をもとに型式を比定し, 分類を行った。
- 34) 型式の記載がなく, 実測図や写真により型式認定が困難であった北川辺町, 妻沼町などを中心に石塔形態に関して調査を行った。ただし現存しない塔も多数あり, 前掲32)の報告書に示される塔数とは異なる場合がある。
- 35) 前掲24) 59頁。
- 36) 前掲31) ①66頁。足立区教育委員会社会教育課編・発行『足立区文化財調査報告書 庚申塔編』, 1986, 99頁。
- 37) 前掲2) 27~28頁。
- 38) 前掲31) ①より, 集計したところ杉並区では86基中37基(43.0%), 中野区では52基中29基(55.8%), 練馬区では121基中44基(36.4%), 豊島区では46基中21基(45.7%), 板橋区では184基中51基(27.7%)となっている。
- 39) 前掲32) ①253頁。
- 40) 前掲32) ②21頁。
- 41) 前掲32) ②21頁。
- 42) 縣 敏夫『図説庚申塔』, 揺籃社, 1999, 78~79頁。
- 43) 前掲32) ②21頁。
- 44) 前掲32) ③163頁。
- 45) 前掲23) 72頁。ただし, 1662(寛文2)年銘の

- 石祠が存在したとされるが、現在は室部が欠損し年代が確認できない。
- 46) 青梅市史編さん委員会『青梅市史上巻』、青梅市、1995、437～443頁。
- 47) 前掲32) ④25頁。
- 48) 前掲32) ⑤105頁。なお都幾川村大付の日枝神社には永正4(1507)年の銘のある庚申信仰と関わりの深い「山王懸仏」が現存しており、中世より庚申信仰がこの地域に存在した可能性は否定できない。山下立「山王信仰の懸仏」、滋賀県立琵琶湖文化館紀要10、1992、95～124頁。
- 49) 前掲32) ⑥3頁。
- 50) 角川日本地名大辞典編纂委員会『角川日本地名大辞典11埼玉県』、角川書店、1975、1218～1222頁。
- 51) 1628(寛永5)年にいわゆる笠付型(当該報告書ではB-2類・本稿の庚申塔分類でF類に当たる)が認められる。野沢均・小川秀樹「墓標の調査-中野区上高田四丁目自證院墓地の調査-」(新宿区教育委員会編・発行『自證院遺跡』、1987)、158～194頁。
- 52) 小花波平六「江戸東京の庚申塔-石工との関連-」(大護八郎編『日本の石仏・南関東編』国書刊行会、1983)、110～123頁。
- 53) 都幾川村では庚申塔以外の石造遺物に「信州高遠水上村半(カ)右衛門」、「江戸浅草御門前石工勘六」、「川越高沢町石工久助」、「武州小川在下里村石工杉造」などが見られ、村内の石工では「石本(工カ)雲河原」がある。庚申塔では在地銘なしで「石工勝蔵」との銘が確認される。前掲32) ⑤IV～V頁。/上尾市の庚申塔では、正徳4(1714)年のC類の石塔に「江戸浅草石や五良兵衛」、明和6(1769)年のH類(箱型)に「岩槻市宿町石工萩原利兵衛」、寛政12(1800)年のB-2類の石塔に「江戸岸嶋南新栗屋勘兵」とある。前掲32) ②16頁。/吉川市では、天保14(1834)年のG類に「石工中村百助」とある。前掲32) ①205頁。/飯能市では寛政7(1795)年の七観音に「江戸四谷住石工松五郎光春」との銘が見られる。前掲32) ③42頁。
- 54) 石工研究の動向については、縣敏夫「IV 石工の研究」(庚申懇話会編『石仏研究ハンドブック』、雄山閣、1985)、198～208頁を参照。
- 55) 西川武臣によれば、嘉永2(1849)年の相模国鶴見村の史料に、江戸本所出身の石工が「渡り職」の石工として、神奈川宿の石工に雇われていたという。西川武臣『江戸内湾の湊と流通』、岩田書院、1993、147～150頁。
- 56) 萱野章宏「袖ヶ浦の石工」、袖ヶ浦市史研究5、1997、109～127頁。
- 57) 前掲56) 124頁。
- 58) 吉原健一郎「江戸の石問屋仲間」、三浦古文化31、1982、44～56頁。59) 西川は江戸後期の村落においては「農間渡世」の石工が存在し、江戸の石仲買人から石を購入し、農村に売りさばっていたことを指摘している。前掲55) 144頁。
- 60) 竹内常行「序章 利根川流域の概要 第4節 江戸時代における大規模瀬替え」(九学会連合利根川流域調査委員会編『利根川-自然・文化・社会-』、弘文堂、1971)、8～10頁。
- 61) 川名登『近世日本水運史の研究』、雄山閣出版、1984、56～59頁。
- 62) 前掲61) 63頁。
- 63) 前掲61) 64～67頁。
- 64) 妻沼町に位置した葛和田河岸の成立については、寛永年間(1631～1648)との『新編武蔵風土記稿』の記載がある。「幡羅郡之四 葛和田村」(蘆田伊人編『新編武蔵風土記稿』第11巻、雄山閣、1957)、214頁。
- 65) 前掲12) 231～232頁。
- 66) 前掲2) 28頁。
- 67) 石川博司は多摩地方における笠付型(F類)の比率が高いことを指摘している。前掲23) 53頁。
- 68) 今回は関東内陸部における検討が主であったが、今後は東京内湾地域や江戸から20里以遠の遠隔地の庚申塔についても調査を進めたい。特に形態的な分析では、塔身高や幅、厚ばかりではなく、頭頂部の傾斜角や装飾要素の記号化などを通じて統計学的な処理を試み、考古学的な分析によって形態の類似度を数値的に明示する手法も視野に検討したい。

Movement of Material Culture between Edo and its Suburbs during the Edo Period:
An Archaeological Analysis of *Koshinto*

ISHIGAMI, Hiroyuki

Archaeological approaches have largely been neglected in the study of the Edo period (A.D. 1603-1868). Although numerous stone monuments from this period are distributed throughout the suburbs of present-day Tokyo, the majority of these monuments have never been studied systematically. In particular, analysis of *Koshinto* (stone monuments of the *Koshin* belief) can shed new light on our understanding of the information flow during the Edo period. Using a typological study of *Koshinto*, this paper examines the movement of material culture between Edo and rural villages that surrounded Edo.

Raw data for this study are collected through both fieldwork and archival research. The area covered in this study includes all the 23 wards of downtown Tokyo, which correspond to the Edo area during the Edo period, as well as eight cities in the suburbs of downtown Tokyo, where rural villages were located. In order to identify the factors that affected the diffusion of stylistic characteristics, both the distance and types of available transportation (availability of overland or river routes) between Edo and its peripheral areas are considered. The total number of *Koshinto* samples analyzed in this study is 2,460 (1,579 from the Edo area and 881 from the surrounding areas).

In this study, all the *Koshinto* are first classified into 7 major types. Their diffusion patterns are analyzed using frequency seriation, an analytical method commonly used in the chronological study of both prehistoric and historical artifacts and features, including gravestones. The result suggests that new stylistic characteristics first appeared in the Edo area. The result also indicates that the adoption of new stylistic characteristics in the surrounding areas was later than in Edo, suggesting the diffusion from Edo to its periphery. It is interesting to note that the rural areas with an easy access to river transportation adopted new stylistic characteristics earlier than in the rural areas that were connected to Edo primarily through overland routes.

These observations are consistent with historical documents that describe the systems of transportation of goods around the Edo area. According to Noboru Kawana, in the Kanto District, river transportation systems were established during the Kambun era (1661-1672). This era coincides with the time when *Koshinto* diffused from Edo to rural areas with an easy access to transportation by river. On the other hand, the diffusion of *Koshinto* to the rural areas that were accessible primarily through overland routes seems to have occurred later. Moreover, in the latter areas, only particular types of *Koshinto* were selected. In other words, the type of available transportation was an important factor that affected both the timing of diffusion and the types of *Koshinto* that were adopted. In particular, the diffusion of *Koshinto* types to the areas with an easy access to river routes did not occur until an efficient transportation system with Edo was established. Further investigation of both archaeological and historical evidence is necessary to understand the interaction between Edo and its surrounding rural villages.

Key words: *Koshinto* (stone monuments of *Koshin* belief), typological study, the Edo period, transportation system.